

淺井 清 松井利彦
佐藤 勝 武川忠一
篠 弘 吉田熙生
鳥居邦朗

編集

小説戲曲Ⅱ

第二卷

明治書院

研究資料現代日本文学

第二卷 小説・戯曲Ⅱ

定価 4,100

昭和55年9月25日 初版発行

編者 浅井 清・佐藤 勝・篠 弘
鳥居邦朗・松井利彦・武川忠一
吉田熙生

発行者 株式会社 明治書院
代表者 三樹 彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社
代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院
〒101 東京都千代田区神田錦町1-16
電話 東京 (292) 3741 (代)
振替口座 東京 3-4991

© K. ASAI 1980 3391-25502-8305 製本 誠光社

は し が き

ある時代の文章は、そこに生きる人間精神の記録である。それはまず何よりも作品として存在し、その歴史的総体が広い意味での「文学」の実質を形成している。これが本シリーズを編纂した我々の基本的観点である。

従来、文学の名の下に扱われてきたのは、主として詩歌・小説の類であった。その多くは青春の歓喜や悲哀をうたい、象徴の森をさまよい、あるいはおぞき苦闘の告白を真摯に記したものであった。それらの作家と作品の研究が、今日めざましい充実と整備をみていることは周知の通りである。

しかし、文学が文章による当代の思想と感情の表現であるとするならば、それは単に詩歌・小説の類にとどまらず、その領域は広大なものと考えることができる。我々はたとえば画家の眩きに芸術創造の秘密を聞き、科学者のエッセイに現代社会への告発を読み、歴史家の文章に民族の運命を予感することができる。我々はこのような広義の「文学」によって自己の精神を形成し、我々自身の生きる時代の意味を明らかにしてきたし、またしつづける。それはまた国語教育が積極的に取り組んできた課題の一つでもあった。

『研究資料現代日本文学』全七巻は、近代・現代の「文学」というものを、言葉で表現された、そして同時代の思想状況を最も明晰かつ直截に伝えているものという観点から見直し、その著者と作品についてのこれまでの資料を集成整理し、現時点での意義を明らかにしつつ、今後の研究課題をも示唆しようとするシリーズである。編纂に当たっては、まず収録対象の拡大を試みた。すなわち、詩歌・小説はもとより、現代の知的散文、すなわち評論家、思想家、自然科学者、ジャーナリスト、芸術家、文学・言語学・歴史学・法学・経済学専攻の学者といった、さまざまな分野で活躍している人たちのエッセイや評論をも最大限に取り上げたことである。次にこれら

の対象を扱うに際しては、次のように配慮した。これまで研究成果のあがっている詩歌・小説については、現在の研究の最尖端の問題を視野に収めながら、作家論・作品論への展開に直接役立つ資料やその紹介を整え、現代の文章については基礎的資料の整備と読解・評価の手がかりを提示した。いずれの場合も、作者・筆者の人間形成、文学的展開については、その叙述が平板な羅列に陥らぬよう、それぞれの問題への視角を明示しつつ利用の便をはかったつもりである。

ここで取り上げた人名や作品の項目の選定に当たっては、近代日本文学史上重要な作家・作品はもとより、高等学校の教材あるいは大学入試の典故としてしばしば採用されるものを網羅すべくつとめている。本シリーズの性質上、時には文学史的価値よりは教材としての価値に重点が置かれていることもある。従って本シリーズは、教材研究、大学入試問題研究、さらには読書指導の資料としても活用することができはすである。

各項目の解説には、研究・教育に携わる多くの方々の手を煩した。編者の意を諒とされ、快く執筆して下さい。各位に厚く御礼申し上げる。終始助力と鞭撻を惜しまなかった明治書院の小林美枝子・藪上信吾両氏にも謝意を表さなければならぬ。本シリーズが従来の評価・研究の動向をふまえた上で多岐にわたる現代の文章を新しい総合的視点から読み解き、指導するための指針として役立つならば、編者の喜びこれに過ぐるものはない。

昭和五十五年二月

編 者

凡 例

一、本巻は、『研究資料現代日本文学』の第二巻、小説・戯曲Ⅱである。本巻及び第一巻で小説・戯曲のジャンルを取り上げる。

一、作家の配列は、活躍した年代順を原則とした。本巻では、昭和十年代から現代までの作家を取り上げた。

一、各作家についての解説は、【人と文学】【代表作解説】【研究の動向】の三つを柱とし、資料としての活用に耐えうるように配慮した。

一、引用・出典の明示や、発行所・発行年月の厳密を期した。又、原典よりの引用は、へゝを付し、原典その他の仮名遣いを原則とした。

一、新聞・雑誌・単行本名は『』で示し、その他は「」とした。

一、年号の記述は簡潔を旨とした。(昭一五・六・二八)は昭和十五年六月二十八日を示し、(昭一五・六〇八)は昭和十五年六月から八月を示す。

一、小説・戯曲ⅠⅡでは、文学史の理解を考慮し、明治・大正・昭和の文学史概観と、文学史の事項の解説を適宜挿入した。

目次

はしがき		1
凡例		III
丹羽 文雄		21
石川 達三		24
外村 繁		26
上林 暁		28
田宮 虎彦		30
石川 淳		34
中山 義秀		45
中島 敦		47
木下 順二		63
梅崎 春生		79
野間 宏		90
椎名 麟三		100
武田 泰淳		106
中村真一郎		116
福永 武彦		125
堀田 善衛		134
大岡 昇平		143
島尾 敏雄		159
三島由紀夫		174
安部 公房		187

文学史事項

戦中から戦後へ		1
文芸復興		5
転向文学		6
戦争文学		8
既成作家の復活		23
新戯作派		44
『日本浪漫派』		9
『文芸文化』		9
戦後の文学		10
民主主義文学		13
戦後派		14
朝鮮戦争と戦後		15
国民文学論争		16
大衆社会状況と文学		17
戦後文学の変質		18
戦後の終焉		19

V 目 次

阿川 弘之	199
原 民喜	210
長谷川四郎	214
井上 靖	219
小沼 丹	236
永井 龍男	238
吉行淳之介	244
遠藤 周作	246
安岡章太郎	256
小島 信夫	267
近藤啓太郎	270
庄野 潤三	273
北 杜夫	278
辻 邦生	290
大江健三郎	300
開高 健	312
深沢 七郎	317
水上 勉	322
司馬遼太郎	326
山本周五郎	328
柴田 翔	332
高橋 和巳	337
小川 国夫	343

戦後生まれの作家たち	20
第一次戦後派	89
『近代文学』派	99
実存主義	105
「政治と文学」論争	115
アンガジュマン・デガジュマン	142
風俗小説論争	158
第二次戦後派	198
『異邦人』論争	133
第三の新人	209
アンチ・ロマン	218
松川裁判	235
文学者の戦争責任	243
『太陽の季節』論争	266
中間小説	269
肉体文学	272
家庭小説	277
チャタレイ裁判	321
成熟と喪失の季節	336
純文学論争	342
「戦後文学」幻影論争	359
内向の世代	376
カストリ雑誌	62
『新日本文学』	114
『近代文学』	124

山川	方夫	349
柏原	兵三	353
丸谷	才一	355
三浦	哲郎	360
黒井	千次	364
阿部	昭	368
古井	由吉	372
秦	恒平	377
日野	啓三	379
野坂	昭如	382
星	新一	384
小松	左京	386
森	敦	388
壺井	栄	390
大原	富枝	394
幸田	文	396
曾野	綾子	400
倉橋由美子		402
瀬戸内晴美		404
河野多恵子		406
森	茉莉	409
吉野	せい	411
郷	静子	414

『小説新潮』	255
『世界』	316
『人間』	341
『綜合文化』	348

戦中から戦後へ

連続と断絶と

敗戦を軸とする戦中から戦後への文学の流れをたどることは、戦争を踏絵とした文学者の転向と屈折・変貌と闇晦の軌跡を追うことでもある。それはまた、それぞれ径庭の差はあれ、ファナティックに露頭した戦時下の民族的昂揚と、占領軍解放下の民主的昂揚との、激しく振幅する極めて政治的な時代の文学的営為を見据え、跡づけることでもある。

だが、この戦中から戦後への価値の逆転を胎んだ時代の文学的営為の総体を定位し、断絶と連続の諸相において捉える文学史的作業は、従来とかく等閑に付されてきた。専ら考察は戦後に偏して戦時の動向を掻き撫でするにとどまるのを通例とした。

桑島玄二が、ビルマ戦線で発狂し、密林に消えた同郷の詩人森川義信の死に触発され、戦争によって埋没していった詩人の発掘と再評価に情熱を注ぎ続け『兵士の詩・戦中詩人論』理論社、昭四八・三）、高崎隆治が、十数年に及ぶ基礎的調査を踏まえて個人紙『戦争文学通信』（昭四六・二）その他で、多くの無名兵士の文学的市民権を要求し、戦争文学の再評価を迫る所以もここにある。高崎にならって言えば、文学的戦後処理は何ひとつ終わってはいないのである。また季刊個人誌『けいらく通信』（昭五〇・一〇）に拠る和田利夫が、昭和十年代に固執し、その思想と文学の波動に緻密な再検証の眼を凝らしているのも、戦時から戦後に続くいわば危機の時代を、自らの「時代の子」としての誠実をかけて正当に相対化

しようとする存在に発するものであろう。

その意味で、橋川文三の『日本浪漫派批判序説』（未来社、昭三五・二）にまとめられた仕事を見逃すことはできない。〈共産党の分裂、後退を経て『統一戦線』の論理と組織の問題が改めて文学と政治の重要な論点となった〉一九五〇年代の後半は、岸政権下の、危機の予感を漂わせた〈異様な『安定』と『均衡』の時節〉でもあって、ジャーナリズムの第二の文芸復興期に擬する動きもあった。その時機に橋川が日本浪漫派の歴史的相対化の仕事を果たした貢献は大きい。

橋川が、その著に収めた「実感・抵抗・リアリティ」「戦後世代の精神構造」以下の論文で、石原慎太郎らの〈歴史意識〉なき世代意識を衝いて、その断絶を嘆き、時代の〈壁〉の背後にある歴史への感覚を求めたのも、再び時代に流されぬために、太平洋戦争の事実過程を、〈歴史の原理・過程〉としてとらえようとする念慮に発するものである。それは、戦争の事実過程をとらえて〈歴史意識としての責任の普遍化〉を求める立場でもある。その〈歴史意識〉形成の原点たるべき今次の戦争体験の重い意味を解さず、ただ回顧趣味としてしか見ようとなし、いわば戦争を通り過ぎただけの石原らを宗とする、戦後に生を享けた〈戦無派〉が多数を占めるのが今日の状況であり、また文学史研究の現況でもあるだろう。

平野謙は、『現代日本文学論争史下巻』（未来社、昭三二・一〇）の解説で、国民文学論議に関わる保田与重郎の論文が作者の都合によって収録できなかったことにふれつつ、戦争という限界状況の中の言説を今日取り扱うためには慎重な用意が必要であることを言っている。〈最近私自身その用意の不充分を痛感しなければならなかつ

たのは、「同時代」という同人雑誌に連載されている日本浪漫派批判の論文を読んだときである」と記し、へわれながら不本意だが、戦時下の文学論議の解説は、これを省略したいと思う」と結んだ。

いわゆる「十五年戦争」下の文学的営為を歴史的に相対化する仕事は、橋川によってその端緒が開かれたといつてよい。それは、日本浪漫派を低い鞍部で攻撃批判するのではなく、高いレベルで批判し、超えようとする橋川の姿勢に発する。

十五年戦争休息期の誕生と成熟

昭和八年五月末の塘沽停戦協定に始まり、十二年七月の対中全面戦争突入に至るまでの、いわゆる十五年戦争の休息期を背景とした文学的状况を「文芸復興」の名で呼ぶことが多い。この時期については、「昭和文学のルネッサンス」(『日本文学の歴史』12)角川書店(昭四三・四)なる猪野謙二の行き届いた総括がある。猪野は、いわゆる文芸復興の気運とその積極的意義とをまっすぐに謳いあげたものとして『文学界』同人を辞してのちに『人民文庫』を発刊するに至る武田麟太郎の「言論の自由、ひいては文学の自由をまでも奪ひかねない政治的圧力、文学的には、かの大衆小説と僭称する通俗読物のパッコ横行に対する挑戦であった。純正な文学の権利を擁護し、若い世代の文学を確立しようとする、文学者の自衛運動、それ自体は消極的な外見を有しながらも、実体に於ては、烈々たる反逆精神に横溢した文学者の積極的行動であった。……」とする『文学界』発刊時の趣旨にふれた文芸時評(『文学界』昭一一・七)中の言葉を引き、これに共感を示した高見順の『昭和文学盛衰史』の所説をとりあげ、彼らの当初における「文学精神」高揚の必然さを「左右両翼の「政治」に対する抵抗」としてとらえていることに注目し

ている。

「文芸復興」という多分に希望と期待のこめられた叫びをよび出した地盤には、文壇的にも強い影響力を及ぼしていたプロレタリア文学が、弾圧と自らの極度の政治主義化によって行き詰まり、退潮を余儀なくされた事情も関わっている。旧ナルプ系の文学者を中心とした『文化集団』『文学評論』『文学建設』『文学案内』誌等の簇生と『プロレタリア文学』の終刊に象徴されるような、一種の心理的解放感すら伴った文学的誕生の季節でもあった。「文学者の自衛運動」とする武田の言葉は、この面にも及ぼしえよう。『文学界』同人に言われる呉越同舟の傾向は、この期の凡その文芸雑誌にみとめられるものである。それを文学者の共同戦線のもしくは統一戦線の志向として捉えることも可能である。「飽くまで生ける現実との正しき聯関に於いて自省的・批判的態度を持して進むことを期する」(編集後記)とした国文学誌『文芸復興』(昭一二・六創刊)をもこの波動の一環として見ることもできよう。貴司山治の「進歩的文学者の共働について」(『行動』昭一〇・六)を一つの到達とする行動主義・能動精神の動向における『文学案内』『行動』両誌の交流にも、その徴標を認めることができる。人民戦線の萌芽を昭和十年代文学考察の基軸に据えようとする平野謙の一連の仕事(『文学・昭和十年前後』(文芸春秋社、昭四七・四)『昭和文学の可能性』(岩波新書、昭四七・七)等)があるが、宍戸恭一のように、当時のインテリゲンチヤ内部に人民戦線の動向というほどの内発的な要因を認めず、天皇制権力が自由主義者までも対象にして強行した「上からの」思想統制による外発的な産物にしかすぎないとするきびしい見方もある(『現代史の視点』深夜叢書社、昭三九・二)。宍戸の批判は、「私

の目する転向文学の典型は、ほとんど「斬られの仙太」一篇にきわまる」とする平野の三好十郎理解にも関わっている。

猪野は、前記の一文で、この期に「第二次大戦後の日本文学にながる、じつに多くの課題とその創造的な萌芽とが出そろっている」ことを指摘しつつ、「へいわゆる『蒼白きインテリ』の手による文化擁護の動きがみられたことは、それがいかに微力なものでもしかなかったにせよ、やはり戦後の彼らの立ちあがりのために貴重な土台を形づくっていた」とする。猪野が文芸復興期の「本質を物語るもっとも指標的な成果」として小林秀雄・川端康成・横光利一らをはじめとする「中堅作家の活躍」を挙げた上、その先触れとしての宇野浩二・徳田秋声・志賀直哉・谷崎潤一郎・永井荷風ら伝統的「大家の復活」と、島木健作・丹羽文雄・石川達三・高見順・太宰治・石川淳ら「新人作家の輩出」を項目立てているように、東の間の「文芸復興」とも言いうるこの時期を中心として、昭和文学の成熟と新しい開花を示す作品が作り出されてもいたのである。

浪漫的帰郷と散文精神の自覚

「僕は日本浪漫派の発生を、プロレタリア文学の強力な自己内省の結果だとさへ考へてゐる」(『獄中信 第十一信』『浪漫主義者の手帳』サイレント社、昭一〇・九)と林房雄は記している。へ一見対蹠的な性格をもつ『人民文庫』と『日本浪漫派』とは、ナルブ解散、転向文学の氾濫という文学的地盤から芽ばえた異母兄弟ともいえよう(『現代日本文学辞典』河出書房、昭二四・七)という平野謙説をうべなうかたちで半ば定説化した「転向」という一本の木から出た二つの枝だ」と言ったのは高見順(『討論日本プロレタリア文学運動史』三一書房、昭三〇・五、『昭和文学盛衰史』二 文芸春秋新社、

昭三三・一一)である。両者の類縁と共に、その至りついた地点と距りへの、よりきめ細かな考察を必要とする。武田麟太郎は、『人民文庫』の目的の一つに「散文精神の確立」を謳い、バルザックや西鶴、近くは秋声を指標として、事物を客観的に探求叙述する批判精神を強調したが、それは、広津和郎が「何処までも現実と対決し、歴史に責任を持つて、傷心せず、執念深くあくまで生きて行かうといふ精神」と説いたような、理論というよりは多く時代の苦難を生きた文学者の心構えとして有効性を持ち得たのであり、「翼賛」ならぬ「へしのぎ」の文学に呻吟する者の心の支えともなったのである。『人民文庫』の抵抗の姿勢については、辻橋三郎の周到な論がある(同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究』「みすず書房、昭四三・一」)。神谷忠孝は『保田与重郎論』(雁書館、昭五四・九)の「あとがき」で、江藤淳・本多秋五の「無条件降伏」論争にふれつつ、江藤淳と保田与重郎に共通するものを「述志の文学」としてとらえ、かつて「神話の克服」で保田与重郎を内在的に批判した江藤が、二十年の歳月を経て「神話」の世界に足を踏み入れつつあるのを指摘して、江藤がかつて書いたように「合理主義がしばしば自らの無視して来た非合理主義に復讐」されるかたちをみる思いがしたと記している。「日本浪漫派が過去のものでない」との神谷の感慨があるごとく、負の遺産として生き続けているのであり、『コギト』『文明評論』『文芸世紀』等々、「日本浪漫派」圏の文学の討究をも含めて、その総体の腑分けと戦後の処理は、今後に残されている。なお、先年自裁した影山正治の『民族派の文学運動』(大東塾出版部、昭四〇・三)『日本民族派の運動』(光風社書店、昭四四・五)の二著は、いわば従来の文学史を補完検証し直す裏の文学史と

しての意義を持つ。

翼賛と抵抗の諸相

小笠原克は「芸術的抵抗と非順応」(『日本文学の歴史12』角川書店、昭四三・四)の結びで、敗戦間もない八月二十一日の「高見順日記」の「私は今、痛烈な愛国的感情に噛まれている」という言葉を含む一文を引きつつ、高見の「愛国的感情」とは、思想上の左翼・右翼のヘナシヨナリズムではないと注した上、「抵抗」を最大限に救出評価することが、それを尺度として半抵抗、半順応をおとしめることであつてはなるまい。「敗戦の悲運は私自身のもの」と、痛憤とともによみがえらせること。それなくして、文学上の抵抗の正当な評価はなし得ないであろう。」と記している。まさに枢要の言である。高崎隆治は、高校の文学史教科書が、高村光太郎をはじめとする聖戦詩人や、同じく斎藤茂吉以下の戦時の歌人・俳人達を捨象していることの不実を怒っている(『ペンと戦争』成甲書房、昭五一・一二)。小笠原の言にならえば、翼賛・半翼賛をも含みこんだ文学史の実相を記すことが「暗愚小伝」を書き記した詩人を正当に遇する道であるに違いない。小笠原は不順応・平常心の作家として荷風・秋声・潤一郎・堀辰雄らにふれている。昭和十三年に始まる武田麟太郎・川端康成・間宮茂輔による小山書店版の『日本小説代表作選集』編纂の仕事も戦時下の時流に抗した虚心の文学的選択が、反ファシズムの営為とも呼びうる実質を持ち得た例として記憶されてよい。

また古賀正義が、正木ろひしの個人誌『近きより』の旺文社文庫

(昭五四・七・八)の解説で語っているように、正木が戦時下の為政者をはじめとする、時代のタブーに向けて放った寸鉄の慨世の言を文学として評価する文学史的作業も要請されよう。古賀は、暗い時代によって磨かれた正木の「あらゆる感傷のぜい肉をそり落とした論理美ともいべきものを体現している」文章を、「時にフランスのモラリストを思わせ、時に気取りを除いた『侏儒の言葉』を連想させる」と顕彰している。正木の『人生断章』(長崎書店、昭一七・七)も近く再刊される。

詩の分野についていえば、竹内久七・高橋玄一郎らの「科学的超現実主義」の立場から革命の芸術を指向した詩誌『Reo』(昭四・三・一二・六)の運動も、正当に評価討究されるべきものである。「リアン」運動の先鋭な文学的抵抗を伝える「抵抗詩選」は、未だ無い。直接的に支配権力に対決した詩ばかりでなく、もっと広い観点から権力者がつくりだす社会的気流へのさまざまな異和感を表現した作品をも収録することで、いわゆる「抵抗詩」の多様さに留意した。」と謳った壺井繁治・城俣他編『日本の抵抗詩』(光和堂、昭四九・一〇)に於いても一顧だにされていないのである。

更に言えば、秋山清が「或る川柳作家の生涯」(『思想の科学』昭三五・九)で紹介し、一叩人(命尾小太郎)によって全集が編まれた鶴彬の、時代を鋭く抉った文業を組みこんだ文学史も編まれて然るべきだろう。

(高橋新太郎)

文芸復興ぶんげいふきん

〔概括〕 昭和期に限定していえば、八年から十一、

二年までの数年間を文芸復興期とよぶ。ギリシア・

ローマの古典文化の復興を唱えて、十四世紀から十六世紀にかけてヨーロッパを席捲したルネッサンスには較ぶべくもないが、緊迫した政治情勢の中で退潮を余儀なくされていくプロレタリア文学と、その狭間に浮かび出たいわゆる純文学とが、微妙に呼応しあうかたちであげた、文学復興のかけ声であったと解釈される。

〔展開と意義〕 昭和七年にプロレタリア・ルネッサンスを自らの課題としてみせた林房雄が、先導者としての役割をつとめたといわれる。八年十一月、『文芸春秋』は「文芸復興座談会」を企画。ここに断片的かつ平面的ではありながら、文芸復興提唱の基盤が示されることになった。中で一つ注目すべきは「プロレタリア文学と純文学の対立して居ると云ふよりは、寧ろ純文学と大衆文学と対立して、居るんぢやないかと思ひます」という徳田秋声の発言である。秋声の視点は、座談会では十分に活かされなかったものの、会の座長菊池寛をも含めた当時の文壇の病弊を、みごとに突いた一言となった。九年一月、『新潮』は「文芸復興について」の考察をしかけて佐藤春夫・青野季吉・広津和郎の論を掲載。先の座談会にも出席していた広津は、分析を一步すすめて

「俗っぽい低級文学のために、片隅に引つ込んだ純文学に代つて、多数の読者に媚びようとする」ヘジャーナリズムの悪傾向と戦いつづけ「真面目な文学」の旗を守り立てたのは「プロレタリア文学に他ならなかったと述べる。林の他、武田麟太郎らの転向作家

をも包含して、動きは一時期活発化するが、こうした彼らの発言の裏に、八年十月から純文学雑誌『文学界』『行動』『文芸』をあい次いで創刊したジャーナリズムの動静や、昭和初年以來沈黙がちであった島崎藤村・徳田秋声・志賀直哉・宇野浩二・広津和郎らの既成作家が、息を吹きかえたように力作を発表したこと等の状況把握があったことは確かである。なおこの前後に高見順・石川達三・太宰治ら新人作家の登場をみ、評論では横光利一の「純粹小説論」、小林秀雄の「私小説論」が出て、大きな波紋を投げかけることになった。が、十一年の二・二六事件、十二年の日中戦争を境に上昇しかけた気運も徐々に変質。青野季吉がへただ自慰的にしか意味のない勝手な幻想」と批判したとおり、政治権力に対する文学の復興という点に関して、いま一つの明快さと牽引力に欠け、結局は不可解なかたちで時流に押しきられていくことになった。

〔研究の動向〕 戦後、こうした文芸復興の行末を見さだめつつ、文芸とファシズムの抗争を軸に中野重治・平野謙らが鋭鋭に論議。評価は大きく分かれながらも、文芸復興期という一時代の解釈に、精神の存立をかけて論ずるかに見えた。これら戦後の動向をも含めて、文芸復興期のかかえた広範にして複雑な問題を整理したものに磯貝英夫の「文芸復興期の文学」(『昭和文学十四講』右文書院、昭四一・一)があり、また、最近のものとしては久保田正文の「昭和文学史」(『日本現代文学史(二)』講談社、昭五四・六)がある。

(中村友)

転向文学

〈概括〉

転向文学とは、そもそも転向者の文学という意味であり、マルキシズムからの転向現象の一環として生じてきたものである。一般的に、転向文学は左傾した作家による作品と、転向を主題とした作品とに分けられるが、その場合、転向者とは主体的にではなく、国家権力の弾圧によって転向を余儀なくされた者のことである。転向文学は、転向の方向性によって、さらに二つに分けて考えることができる。一つは、中野重治や村山知義などに見られる傾向で、マルキシズムの正しいことを認識しつつ、思想的転向ではなく、自己の弱さによって闘い破れた、いわば良心に反して転向した、その倫理的苦悩などを告白した一連の私小説的作品群である。もう一つは、島木健作を代表とする、それまでの左傾体験そのものを根底的に覆し、マルキシズムにとって代わる新しい思想によって自己変革をはかり、良心の名によって行われた転向の完成をめざした作品群である。後者は方向性として、さらに国粹主義へ向かうものと、農民や一般大衆とに向かうものとが考えられる。農民へ向かった作家は後に国粹主義へ傾斜し、大衆へ向かった作家は戦争文学を経て、日本浪曼派に行きつく。

〈展開〉

転向文学出現の経緯は、概ね次のようであった。

昭和六年の満州事変以後、軍国主義勢力の伸長による激しい弾圧の嵐と、こうした弾圧に対抗するため、プロレタリア文学運動の基盤であった日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）が、政治主義的偏向を強め、文学者たちを圧迫していた状況のなかで、昭和八年六月八日、当時の日本共産党指導者佐野学と鍋山貞親は、市

ケ谷刑務所内で、「共同被告同志に告ぐる書」を発表した。この共同声明文は、必ずしも共産主義思想の放棄を説いたものではなかったが、後に、高見順は「昭和文学盛衰史」のなかで、そこには、転向はその最後の段階として、右翼的日本主義者にならなければ、転向とは認めないという明示があると指摘しているものだけに、治安維持法の被告の共産黨員やそのシンパに、多大な影響を与え、昭和十年末までには、共産主義者のほぼ九割が転向した。こうした転向をはじめ、同年二月の小林多喜二の獄死や、昭和九年二月のナルプの解散などを契機に、プロレタリア文学運動は、その運動エネルギーを失っていった。こうした危機的状況のなかで、雑誌『文学界』が創刊され、文芸復興を意味する三つの流れの出現の担い手となった。三つの流れとは、既成作家の復活、モダニズム作家の成熟、それと転向文学の出現である。

転向文学が現れた当時、問題になったのは、非転向者側からの批判であった。宮本百合子は「冬を越す蕾」のなかで、〈転向の過程と、それ以後の思想傾向を明らかにしてはいない〉とし、転向者の姿勢を厳しく追求した。高見順はそれに対し、野間宏の言葉〈転向文学は、思想的に転向して新しい思想を求める文学ではない〉を引用しつつ、転向の過程や転向後の思想傾向を曖昧にしか書いてないのは、転向文学としてだけではなく文学そのものとしても大きな弱点であると認め、しかしそれは書けなかったと、倫理的な苦渋の姿勢を表している。一方、島木健作の「生活の探求」は、転向後の新しい思想傾向が表れており、非転向者の投げかけた批判は、転向文学における二つの方向性を、その端緒にお

いて明確化した役割を持つものであった。

しかし、現在転向文学を論じる上で最も大きな問題は、転向文学のカテゴリの拡大の問題であろう。そもそも転向文学は、転向概念の規定の仕方によって違うものであるだけに、転向文学とはなにか、という問いかけに、単純には答えられない複雑な側面を持っている。

例えば、本多秋五は『転向文学論』のなかで、転向概念を、
 〈共産主義者が共産主義を抛棄する場合〉、〈一般に進歩的合理主義的思想を抛棄することを意味する場合〉、〈思想的回転(回心)現象をさす場合〉というように三つに定義している。二番目の定義によれば、加藤弘之も森鷗外も徳富蘇峰も転向者であり、転向文学ということになる。また、吉本隆明の「転向論」によれば、転向とは「日本の近代社会の構造を、総体のビジョンとしてつかまえそこなったため、インテリゲンチヤの間におこった思考変換をさしている」とし、一般的には非転向の典型とされる蔵原惟人や宮本顯治・宮本百合子も、非転向型転向として、転向のカテゴリに含まれ、非転向は存在しないことになる。同様に窪川鶴次郎は「転向文学論」で、転向文学の最も早い例として、森鷗外の「舞姫」をあげている。こうした傾向は戦後世代の転向文学論にも多くみられ、倉橋由美子・高橋和巳・柴田翔なども転向文学のカテゴリに含まれている。これはまさに、転向概念の捉え方の問題という他はない。つまり、転向を昭和初期から十年代にかけて現れた事象とみるか、あるいは日本近代史全体における権力と思想の関係とみるか、という問題になってくるのである。現代に

おいても、転向文学のカテゴリは拡大化の方向にはあるが、磯田光一や松原新一にしても、それぞれの転向論に共通項があるとはいいいにくく、極めて多様な面を持っている。非転向が相対化されたことで、転向も多様化された結果とみるべきであろうか。

〈意義〉 転向文学の意義を一概に明確化することは、きわめて困難である。特に多様化に向かっていて現代では不可能といっても過言ではあるまい。そこで参考のため次の文章をあげておく。

〈総じて転向文学の担った課題は、思想上の挫折が開いた深淵のなかで、人間の実存と民族の現実への認識を深化させ、あるべき自己の再建を不可欠の要請としたところにあるといえよう。またそこには日本近代が蓄積したものの真の実質をただすという、きびしい試練の一局面があったことも事実である〉(『転向文学』『近代日本文学史』明治書院、昭四一・五)

〈研究の動向〉 転向概念や転向文学に関するものとしては、思想の科学研究会編『共同研究・転向上・中・下』平凡社、昭三四・一(三七・四)、吉本隆明『芸術的抵抗と挫折』(未来社、昭三四・二) 同『近代批評の展開Ⅱ』(『岩波講座・日本文学史』第十四卷所収)、本多秋五『転向文学論』(未来社、昭三三・一八) 高見順『昭和文学盛衰史』(文芸春秋新社、昭三三・三、一一)、松原新一『転向の論理』(講談社、昭四五・一) などがある。またプロレタリア文学との関連では、平野謙『現代日本文学入門』(要書房、昭二八・七)、同『昭和文学史』(筑摩書房、昭三三・一二) 久松潜一編『日本文学史』近代(至文堂、昭三二・六) などがある。

(松本英夫)

戦争文学（戦前）

《成立》 昭和十二年七月七日、日中戦争が勃発したが、まもなく新聞社や雑誌社は、

著名作家を従軍記者として戦地に派遣した。石川達三は南京攻略での日本軍の残虐行為を「生きてゐる兵隊」でまなましく描いたが、発表誌の昭和十三年三月号の『中央公論』は発禁に付され、作者は起訴されて有罪の判決を受けた。この事件によって、戦争文学の軍部迎合の方向がほぼ決定された。火野葦平は徐州作戦に一下士官として従軍した体験に基づき、へ人間らしい心と非人間的な戦争の現実とを、何とか調和させたいという（中野重治）心持ちによって『麦と兵隊』『改造』昭一三・八）で兵士の実状を描いて好評を博し、戦争文学ブームを捲き起こした。

《展開》 昭和十三年九月には、内閣情報部の命により、「ペン部隊」が結成され、久米正雄・川口松太郎・菊池寛・佐藤春夫ら多くの文学者が武漢作戦に従軍した。その後も文学者の従軍は引き続き行われたが、太平洋戦争が開始されると、更に多数の文学者が陸海軍の報道班員として、南方諸地域へ派遣され、数々の戦争文学を生み出していった。評判になったものとして、尾崎士郎の『悲風千里』（『中央公論』昭一二・一〇）火野葦平の『土と兵隊』（『文芸春秋』昭一三・一一）上田広の『黄塵』（『大陸』昭一三・一〇）『建設戦記』（『改造』昭一四・四）日比野士朗の『呉淞クリンク』（『中央公論』昭一四・二）丹羽文雄の『還らぬ中隊』（『中央公論』昭一三・一二）『海戦』（『中央公論』昭一七・一一）岩田豊雄『海軍』（『朝日新聞』昭一七・七・一二）

などがあった。これらは部分的に真実を描写することによって、複雑な心情を吐露しながら、結果的には戦争遂行に大きな役割を演じたのであった。

《意義》 敗戦後、火野・上田・尾崎らはGHQより追放指令を受け、他の文学者も若手批評家より戦争責任を追求された。例えば、火野葦平は荒正人によって「へかれは『聖戦』を描いたが、『戦争』は描かなかった」と鋭く指摘された。また、これらの戦争文学全体に対しても、《文学が政治の奴隷となった時代の、奴隷の文学》、《近代的自我》との関わりにおいては完全に《ゼロの文学》（小松伸六『戦争文学の展望』『昭和文学十二講』所収、改造社、昭二五・一二）、《そのなかでの個々の作家や『陣中』の作家の屈折した形での抵抗はあったが、全体としては戦意高揚用の戦争『文学』が氾濫し圧倒的な勢いとなり、敗戦とともに犯罪的な紙屑と見られるにいたった》（小田切秀雄『戦争文学』『日本近代文学大事典』第四巻所収、講談社、昭五二・一一）などと全否定が行われているが、やはり必要なことは、伊豆利彦もいうように、《戦時下の思想と文学をそれだけ切り離して、全面的に否定したりするのでなく、それを日本の近代文学史の全体的再検討の一環として、否定的なモメントにおおわれた積極的モメントを明らかにすることだと思う》（『戦争と文学』三好行雄・竹盛天雄編『近代文学6』所収、有斐閣、昭五二・一〇）という提言に耳を傾けることであらう。

（坂上博一）